ひとり旅ふたり旅

佐多稲子

北洋社

著者紹介

1904 年長崎に生れる。一家の窮乏で小学校五年生で学業を廃し、キャラメル工場はじめさまざまなしごとを遍歴する。

著書　小説『キャラメル工場から』『くれない』『素足の娘』『私の東京地図』『機械の中の青春』『いとしい恋人たち』『体の中を風が吹く』『歯車』『灰色の午後』『女の宿』（女流文学賞）『渓流』『振りむいたあなた』『塑像』『樹影』（野間文芸賞）など。随筆『一婦人作家の随想』『季節の随筆』『罪つくり』『女茶わん』『生きるということ』『女の道づれ』『あとから生きるものへ』『ひとり歩き』など。ほかに『佐多稲子作品集』全 15 巻がある。

ひとり旅ふたり旅

一九七三年三月二十日　第一刷発行

著　者　佐多稲子

発行者　阿部礼次

発行所　北洋社

東京都千代田区富士見二―二―一

電話(二六四)〇五五一　〒一〇二

振替　東京一三三二四三

印刷所　精興社

製本所　牧製本

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

© Ineko Sata 1973

0095-912014-7789

I

町なかの庭 5
町内のこと 9
わが家は母系家族 12
犬との縁 16
身辺のこと 18
ある日の街頭で 21
*
匂いというもの 24
きものとくらし 28
花の訪問着 28
大島紬の挿話 28
小千谷ちぢみ 31
半えり 32
能登上布 35

結城紬 40
盛夏のうすもの 46
きものとともに 48
素足の美しさ 49

II

昔のこと　この頃のこと 53
ロシヤ革命についてのおもい出 56
私の東京地図 60
四十五年ぶり 64

*

文学的出発のころ　掌篇・随想抄 69
夢 69
小間使の誇り 72
花の魅惑 78

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寒さの連想　80
子供　83
月にさそはれる　85
晴着の妙　88
新緑の魅力　90
梅の花　93
欅によせて　97
晩秋の感情　100
五月の成長　102
一人旅二人旅　104
＊
夢とうつつ　107
Ⅲ
冬の旅　113
旅の記憶にまじるもの　116

私の仏縁 120
尾瀬の水芭蕉 123
日光のおもい出 126
隠岐の島の旅情 129
ゆずり葉のこころ匂う町　萩・長門 135
＊
雲仙・島原へ 145
長崎夜景の今昔 147
長崎・稲佐の墓地 150
長崎の魚の名 154
古賀人形とおくんち 158
長崎の非情 162
＊
ソヴェートでのいろいろの思い 164
ソ連の働く人の感じ 168

ヤースナヤ・ポリャーナを訪う　171

IV

老童女のつきあい　177

＊

心にきざむ人たち　181

徳田　秋声　181　窮屈を感じさせぬ人

柳瀬　正夢　184　暗い時代の忘れえぬ友情

杉山智恵子　186　夫を慕う病床の妻

宮本百合子　189　クマとエレガント

ささきふさ

芥川龍之介　192　自殺三日前の質問

室生　犀星　195　厳然として鮮明な「言葉」

堀　辰雄　198　むくいることなきおもい出

小林多喜二　200　不自由な生活に耐えたが……

浜本　浩　203　バンザイの好きな人

大田　洋子　才女のわがまま　206
畔柳　二美　色彩を拒否した画家　208
池野　清　純真無垢ひたむきに詩作　211
中野　鈴子　自然な心の動き　215
壺井　栄　鳴子のこけし作者　218
大沼新兵衛　「ふだんのまま」を貫く　220
広津　和郎　大切な存在を失う　224
志賀　直哉　ひとつの縁をおもう　225
川端　康成　胸を打つ思考の確かさ　229
野上弥生子　火の行の激しさそのまま　233
土門　拳　まこと心の人　236
水上　勉　*　240
心に残る編集者

V
明るい陽光 247
＊
事実さがし 250
創作力の負け 253
話し言葉 255
作品と読者の関係 257
このごろ思うこと 262
辞書と私の関係 265
わたしの文章作法 269
おもい出の批評 274
＊
深夜の顔 276
VI
たまに作るもの 281

好味抄 283
味けなさ 283
主婦よハズめ 284
食事時のくせ 284
菊を食べる 285
〝残しといてよッ〟 286
目にうつる味 286
心ばえ 287
赤倉の珍味 288
あでに美しきもの 288
うまいモチを 289
果物の美しさにおもう 290
＊
遊覧バス 293
ワンマンカー 295

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

床は歩くところ　297
志と郵送料　299
浅間の山裾から　301
或る日　305
ひとりごと　309
花一輪の母　315
ある女性の今日　318
素直さの中に　328
八月の記憶は重い　331
＊
もの思わるる時　334

ひとり旅ふたり旅

I

樟　私の好きな一字

いったいに私は木扁の字が好きである。梅、松、桜というように、木扁の字に立木をあらわすのが多いのはあたりまえなのであろうし、その字を見れば、杉なり、樫なり、その木がすぐ連想されてたのしい。木扁の字が好きなのは、きっと立木が好きということかもしれない。

私の郷里長崎には樟が多かった。私は子どものとき、椿と樟の下であそんだのである。高々と見上げる樟は幹が太くて頼もしく、まっ黒に葉が茂っていた。この木から樟のうができると知っているせいか、南の木にはちがいないが楠ではなく樟なのだという気がしている。この字が好きなのは、子どものときなじんだ樟への愛着なのかもしれない。が、字そのものの形としても好きである。木扁が好きと同時に、章という字も好き。形の上からも樟という字を美しいとおもう。

（一九七〇・十一「ミセス」）

町なかの庭

わが家は大久保の駅近い路地の裏にある。二階の窓をあければ新宿の盛り場の風も吹き込んでくるといえないこともない。そんな町なかだから、庭とは名のみ縁さきの少々のあき地なのだ。さいわい裏手のお隣りが村山知義さんのお宅でそちらに白梅や桃の木が植えてあるのでよっぽど助かっているが、前方や横手はアパートがくっついている。このアパートを考えればわが家のあき地などもったいないくらいなのかとおもったりする。マツが二本、モクセイとウメの木、その他カキやカエデやシイやヤツデ、ジンチョウゲ、ドウダンなどが雑然と植わっている。こんなふうに書きあげるとよっぽど広い庭のようでおかしい。十数年前にここへきたとき、強制疎開（戦時中こんなことがあった）であき地になって木などひとつもなかった。こちらにしろ庭をつくる見識もなければ余裕もなかったが、私が紅梅を好き、といったのを覚えていて、村山夫人の清洲すみ子さんが、紅梅をくだすった。それがわが家のいまのウメの木である。その後にどこかのお家で庭をこわすので安いから、と近所の植木屋さんがマツ三本とモクセイを運んできて植えた。そのマツの一本が枯れ、二本がどうやら保って、二階の窓に達している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com